

2012年1月29日

2011年度科研費チーム冬季研究合宿報告

「災害とCSR」

事例報告：最近の被災地における復興支援の取り組み

江橋 崇

1 災害とCSR 研究の現状

- (1) 2011年11月24日、日中韓共同研究者会合における発表
- (2) その他の研究

2 災害とCSRの現状

- (1) 個別の企業による取り組み（企業CSR）
- (2) 企業の属する業界単位の取り組み（業界CSR）
- (3) 経済界の全体による取り組み（財界CSR）

3 東日本大震災被災地での取り組み

- (1) 概況
- (2) 宮城県石巻市における私自身の取り組み事例の報告

資料：石巻市における取組みと震災復興の「非営利株式会社」設立（2012年1月17日：神奈川県内の知人にあてた状況報告の手紙）

〇〇様

すっかりご無沙汰しています。丁重なお手紙を頂いて恐縮しています。お話ししたいことは山ほどありますが、果てしないこととも思えます。とりあえず、震災への取り組みについてだけお伝えします。

震災は大ショックでした。1000年に一度の大災害でして、当初の混乱の中では30,000名近くだと報道され、現在は20,000名近くだと判明しましたが、これだけ多くの人命が失われるという事態は私の生きてきた中でも最大級の衝撃でした。地震、津波、原発事故に加えて、震災直後から気仙沼の津波火災が報道されました。古いタイプの石油タンクが流されて重油が流出し、それが大火災の原因になっている映像を見ると、もう10年以上も前ですが、神奈川ネットで人間の安全保障の研究会をしていたときに、県内の石油タンクが1,300基ある中で1,100基が水島事故以前の古い設置基準のままで安全性が危険であり、地震が来たら確実に倒壊して大火災になると検討していた頃を思い出しました。

当時、神奈川県当局にその具体的な場所の特定を情報公開するように要求したのに、そんなことをしたら協力企業が 2 度と情報を提供してくれなくなると断られてそのままにしてしまいました。私は、当時はそれで仕方がないかと放置してしまったのですが、もし神奈川で今回の規模の大地震が起これば、いったいどのくらいの石油火災が起きるのか改めて恐怖を感じます。また、タンクの流れている映像を見ると、あのときあんなに簡単にあきらめないで情報公開と安全確保の改修を迫り、それを広く全国各地に発信したら、もしかしたら気仙沼の石油タンクも安全基準が強化されて火災が防げたかもしれないと思えます。せっかく人間の安全保障という考え方を持っていて、市民生活の安全への危険を察知できたのに、実際には災害の対応には何もしてこなかった自分のいい加減さが悔やまれます。気仙沼の映像が神奈川に重なって、自責の気持ちもあって涙が止まりませんでした。今でも、録画した映像を見ると気が滅入ります。

私には、今はとくに何もできないのですが、少なくとも、将来、2011 年という年を振り返った時に自分に恥じることはないように生きることだけはなしとげようと思いました。とりあえずできたことは、この数年進めてきた企業の社会的責任経営という観点からの、企業による災害に対する緊急支援、生活支援、地域復興への取り組みの調査研究でして、日中韓の共同研究も、2012 年度のテーマを急きょ「災害と SCR」に切り替えて研究を進めて、11 月に東京で研究成果の発表会を行いました。また、日本の企業や労組にも、社会的責任を果たすように働きかけました。今回は、企業も動いて、巨額の義援金、物資、ボランティアを現地に送り込みましたし、情報提供でも活躍しました。よく阪神淡路大震災の年は NPO 元年だといわれますが、それからいえば、2011 年は企業の社会貢献元年なのかなとも思います。

それとともに、私個人として、被災地に何回か通って、主として宮城県の石巻市に行っています。現地の復旧、復興の活動に協力しています。その一つが復興住宅の建設です。

復興住宅は、要するに、行政が進めている仮設住宅の建設が実に多くの問題を抱えていて、とくに宮城県内のそれはレベルがひどすぎてとても見ていられないということで、モデル住宅を作って実物でもって行政の怠慢を明らかにしようとして、市民と企業の民間の力で、2DK 程度の広さの家ですが、10 棟の本格的な住宅を作りました。石巻の北端、北上川の河口にある旧北上町の十三浜地区にある海の見える高台に作りました。11 月下旬には竣工して入村式も済み、テレビなどでも大々的に報道されました。それなりに、社会変革に向けて課題を提起するというソーシャル・ビジネスの働きは実現できたかなと思います。

住宅は当初は 1 棟の建設費用が 1,200 万円程度と考えていました。仮設住宅の建設費は 590

万円で、このほかに被災者には残らず 100 万円で全壊家屋には 200 万円の公費が出るので、合計で 900 万円の工費が出ています。これにあと 300 万円程度の自己負担を覚悟すれば、テレビで報道されているように、抽選入居なので地区がばらばらになってしまい、入居すれば、夏は暑すぎ、冬は寒すぎ、風雨も虫も入り込んでくるような悲惨な仮設住宅に入らないで済むのです。

それに、仮設住宅の建設は東京や関西の企業におカネがみんな行ってしまう仕掛けで、地元の経済に回らない。そこで、私たちの復興住宅では、地元の材料を使い、地元の職人さんを雇って木造の建物を作りました。これで、2 年後の立ち退きを迫られる心配もなく定住できるし、家賃は月 30,000 円以下に抑え、土地は定期借地権付きにしてありますので、15 年後くらいに居住者に買い取ってもらうことになります。

実際には道楽が過ぎて予算をオーバーしてしまいましたが、無事に完成して、見に来た各地の被災者はこういう住宅が欲しかったのだと涙を流してくれる状態です。安直な仮設住宅作りで、それも遅々として進まない行政に対する、実物を通じた痛烈な批判になっていると思います。ただ、最初の段階では本当に市民と企業のみでできるのか半信半疑でしたし、建物を建てることに力が入り過ぎて事業の広報が今一つでしたので、地元の方は、テレビなどで大体の様子は知っていても具体的な姿は見えていないことが多いので、これから現地の見学をどう作り出そうかと考案中です。

もう一つ、石巻では、私たちが進めている被災地の支援事業について、いよいよ会社を立ち上げることを決めて、その準備を始めています。私たちのミッションは、①具体的な地域の復興の支援と、②伝統産業の復興です。そのために、③地域に残る大事な文化財の修復、復元を柱に据えて地域の伝統文化の継承を眼に見えるものにしたと思います。こうした事業には相当額のお金の出入りが生じますので、この際、NPO のスタイルではなく、ソーシャル・ビジネスを進める会社のスタイルで取り組もうと思い、阪神淡路大震災の頃はまだ NPO 法人の制度もなかったこともあってちょっと流行った非営利株式会社を作ることになりました。社会事業に取り組む会社ですが、一応は会社ですから、事業に必要な資金を調達し、又最低限度の収益が確保できるようにしなければなりません。また、会社に求められる経営の透明性も確保しなければなりません。これまですでに事業形態で NGO の活動を進めてきた方にすればごく当たり前の活動のスタイルでしょうが、私たちにとっては初めてのことで、右往左往しつつ前進しています。

①の事業としては、気仙沼市のある集落に A 家という明治からのイワシ漁の網元の屋敷がありまして、3 度の大地震と大津波を経験して堪え抜いています。この建物がある地区は、震災前はワカメやコンブの好漁場で、地区の人たちはその栽培と収穫、加工を共同作業で

行って生きてきました。そこで、この建物を復元修理して、地震から立ち上がったシンボルにして地区の復興を進めたいと思います。この屋敷は、今回の津波では地区の奥の山際まで 50 メートル以上流されました。被災地では、救助に入った自衛隊が被災者の救助と犠牲者の遺体の搜索を優先させるということで流された建物などはことごとく破壊してゆきましたが、その地区では地区の人と自衛隊の指揮者とで話し合っただけで屋敷を慎重に解体しつつ救助を進めたので、部材がきちんと残されています。私たちは、この屋敷の復元と、周辺の環境の整備、とくに一般の住民の住宅の再建と浜の作業小屋と海中のがれきの撤去、整備を進めて、震災前にコンブの好漁場だったのですから、そういう生活の糧も再現して地区として復興させたいと思っています。屋敷の再建に数千万円かかり、地区全体の再建には数億円が必要です。でも、完成すれば、1軒で年収 1,000 万円以上の収入が考えられる 20 戸程度の漁師の村が再建できます。

もう一つは、スレート屋根のきれいな地区の街並みの保存です。スレート瓦は明治、大正昭和の洋風建築や日本式の家屋の屋根などで盛んに用いられました。最近では東京駅の建物の屋根がスレート葺きで、被災地ががんばって修復用の瓦を届けたという美談が話題になっていました。石巻市には、北上町に B 地区という 50 戸ほどでどの家もスレート瓦という美しい地区があって、今回の津波の大被害を受けて全戸が全壊扱いに指定されており、このままでは国の費用で解体されて地区消滅になりそうですので、その地区を何とか残そうと考えています。これも、建物については修理なしにはもうほとんど財産的な価値はないのですが、それでも買収と修理に費用がかかります。残したい戸数も多いので、これも数億円の事業規模になるのかなと思います。

このスレート瓦は、今では日本では石巻市の北上町の隣の旧雄勝町、今の雄勝地区でしか生産されていません。それも、最盛期は数百人を使って生産していたのに今ではわずかに従業員数人の会社が 1 社という規模に縮小していて、スレート屋根の新規の需要はあまりなく、稀にそうしようとする人がいてもスペイン産の安価な輸入品が使われてしまうので、雄勝のスレート瓦は不振で、わずかに学校教育での習字の授業で用いる硯の生産を細々と続けていた程度です。その会社、工場が津波で土台以外はすべて流されてしまい壊滅して、もう生産再開のめどは立っていません。

石巻にはこういう産業が地元にあったので、その豊富な資源を使って、スレート葺きの屋根が並ぶ美しい尾ヶ崎地区もできたのです。ですので、私たちは、B 地区の保存とともに、スレート産業の灯を消させないようにしたいと思います。雄勝のスレートが減ったら、今後、国産のスレート瓦は消滅するのですから明治期以降の文化財の修復でも差しきわが出てきます。そこに気付いて経産省も伝統産業の復興計画でこれを取り上げることになりましたので、なんとか産業の再開に必要な需要を見つけだそうとしています。一時は薬師

寺のように寄進瓦の方式で東京駅の修復計画にもっと深くつなごうかと考えましたが、肝心の JR 当局が仕事の安全運転でなるべく早く東京駅を復元しようということで計画の変更を嫌がり、うまくいきませんでした。そこで今は、再来年から始まる重要文化財の門司駅の修復計画で雄勝の瓦を市民が 1 枚 5,000 円程度で寄進することにして、そのうち 3,000 円以上を被災地の伝統産業の復興に振り向けるということで、なんとか復興の支援につなげたいと思っています。

私たちのミッションの②「伝統産業の復興」は、とりあえずこのスレート産業から始めようかと思っています。そのことも絡めて、スレート葺きの美しい尾ノ崎地区の保存を考えています。

ミッションの③「地域に残る大事な文化財の修復、復元」ですが、古文化財の修復をしているようなプロはとかく江戸時代からの建物などに関心が強いと思います。私は、私たちのような年寄りであればそれでもいいけど、今の若い人には江戸時代は遠すぎる過去でして、明治、大正、いや昭和前期の建物や文化財なども立派に古文化財です。ですから私は明治期以降の洋館の修復、再建も視野に入りたいと思っています。去年は、C 市内に昭和初期に建てられた美しいカソリックの修道院があり、今は短大が使っているのですが、それが地震で大きな被害を受けたので修復を進めようと考えていました。この建物はカナダの教団本部からすべての材料を運んで日本で組み立てたもので、もう少し時間がたてば重要文化財に指定されるレベルのもので、こういう文化の蓄積が少ない C 市内では見るべき近代建築でした。また、建てたのが大正、昭和初期に活躍した D 市の著名な洋館の大工さんで、この人の作品で現存するものが少ないこともあって、D 市の文化財保護を推進している機構が再建を支援してくれるというところまでこぎつけました。ところが、肝心の所有者の修道院、短大が、手間のかかる建物の維持を嫌ってどんどん取り壊してしまいました。私たちからの修復の申し出に対しても、余計なことをしてくれるなという具合でした。ですので、これは失敗でして、今は、それに代わる被災地の洋館を選定中です。

その他、いろいろと考えていますが、会社は 2 月中には発足させたいと思います。そして、3 月 3 日から震災から 1 年の 3 月 11 日にかけて雛祭りのキャンペーンをして私たちの思いをアピールしたいと考えています。

会社設立を記念して、石巻現地の女性たちに中心になってもらって、津波で 74 人の学童が亡くなった大川小学校の跡地に、亡くなった子どもの数だけの雛人形を飾ることと、私たちの作った十三浜地区の復興住宅の庭先に数百の雛人形を飾りたいと思います。テーマは全体として「鎮魂と復興のひな祭り」でして、大川小学校の方はこの趣旨が誰にもはっきり見えますが、復興住宅の方は、すべての人形を海の方を向けて並べます。津波で海に流

されて亡くなりまだ遺体も見つかっていない多くの人々の魂への呼びかけです。復興住宅は海が良く見える高台にありますので、この趣旨にはふさわしい場所です。多くの人が見に来てくれて、民間の力だけで建てた復興住宅のアピールにもなればいいと思うのですが、入居している家族の女性たちにはもう少し頑張ってもらって、見物に来る人に白酒をふるまえるといいなと思っています。春まだ寒い石巻ですが、悲しいけど明るい一年目の鎮魂になれば嬉しいです。すでに、話を進めていると各方面から支援の申し出が来ています。

被災地を見ていると、これの復興には女性の力が十分に発揮されねばと思います。ところが東北は古い考えの地域でして、とくに三陸沿岸は、高齢の漁師の男性がいばっていて、女性はそれに従いながら水産加工業を支えています。そういう地域で、これからの復興に女性のリーダーシップと力を求めるのですから、まずは会社の設立記念のキャンペーンも、女性の節句に女性中心でイベントをするという選択をしました。

石巻現地ではいろいろな人と知り合いました。被災した人たちに加えて、さまざまな契機で現地に駆け付けている人たちとも知り合いました。震災直後に湧き起こった被災者支援ブームがもう冷めて、志のある者しか残っていないように思います。そういう中で私の知人、友人は、多くまだ現地にかかわり続けています。今回、神奈川からの支援の活躍もお聞きしてとても嬉しく思っています。今日は被災地で活躍している「樹木セラピー」の金沢大学の先生が法政大学の現代法研究所にきてくれるというのでお会いすることになりました。被災地の復興では緑が大事というのが私の持論ですので、専門的な知恵を学びたいと思っています。緑の復興の関係では宮城県の福島県寄りの県境にある亘理町、山元町で防風林の再建に取り組んでいる E さんという苗木屋さんと知り合いました。彼も宮脇理論の自然植生の回復を考えている人で、宮脇さんは遠い昔、武蔵野市市民の緑化委員会での活躍の頃から私たちに近い人として、お弟子さんの進士五十八さんともども自治体学会などでも活動をともにしてきていますので、E さんとは共通の友人がいる仲ということで大いに意気上がっています。あるいは、復興住宅では、安納積みの石垣作りの名人で、F 庭園という G 市内で造園業をしている方とも知り合いました。彼は故白洲正子さんの知遇を得ていた天才で、私も白洲さんとは親しくさせていただいて、鶴川の武相荘にも何度もおじゃましていますので、これまた共通の知人がいるという仲でお互いに協力できました。

バタバタと書いてきました。被災地における復興への協力的一端でもお分りいただけたら幸いです。皆様にもよろしくお伝えください。とりあえず、失礼します。

1月17日

江橋 崇